

嬉しくも釈迦の
みのりに逢ふひ草



第十教区主催【法話と詠讃歌の集い-合掌のせかい-】平成十五年十一月開催

団 子

平成16年1月20日
第22号

発行 梅花流師範・詠範の会
会長 柴田弘一
題字 初代会長・故加藤信三師

梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町 待月院 嶋森憲雄
電話 (0188-52-9566)

梅花元年

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 柴田弘一

平成十六年の新春を迎え、講員皆様のご健勝とご清福を祝祷申し上げます。

あたたかで輝くような好天にめぐまれた元日でした。

みなさまも、それぞれ「心願成就」の願いをもって新たな出発を期したことを思います。

さて、昨年は「全国大会」に明け暮れた感があります。大盛会でした。清興、記念誌ともに大好評でありました。

その余韻もさめやらぬ今年は、その成果と真価を問われる年ではないでしょうか。

と申しますのも、県内の寺院の半数以上には、まだ梅花講がありません。『講設置』を呼びかけることと併せて、新入講員を増やすことに、宗務所はじめ、当会、それと講員皆様の力と智慧をもって、梅花の魅力を伝える積極的な取り組みをしなければならない年であると思います。

昨年暮れに第十教区主催の『法話と詠讃歌の集い-合掌のせかい』の開催は、全国大会の余韻をそのまま引き継ぎ、梅花の魅力を十分に伝え、た素晴らしい集いだったそうです。

その実行力に敬意を表すると共に、参加された方々の至福の喜びを感じます。

共に今年を「梅花元年」とし、これから更に工夫を重ねながら、伝えようこのよろこびを、を、実際に出来ることから実行して行く年にしていまいるまいしょう。

秋田市 東泉寺住職

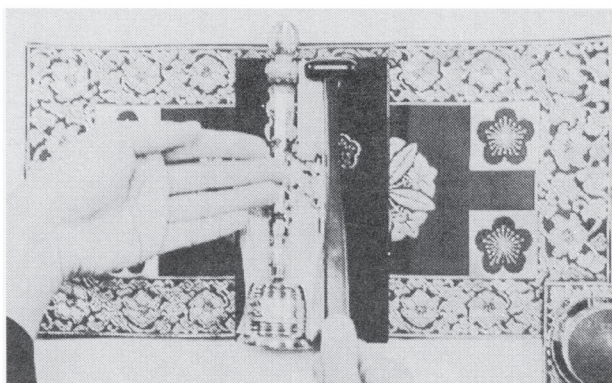
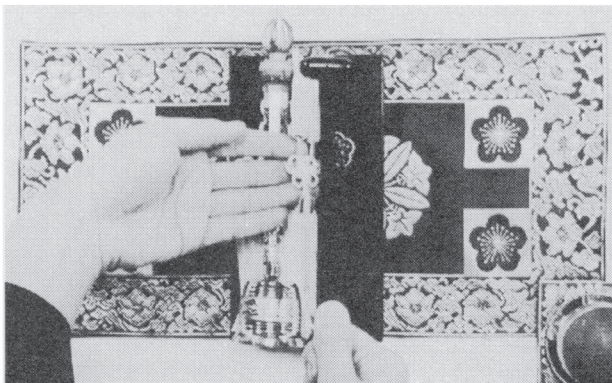
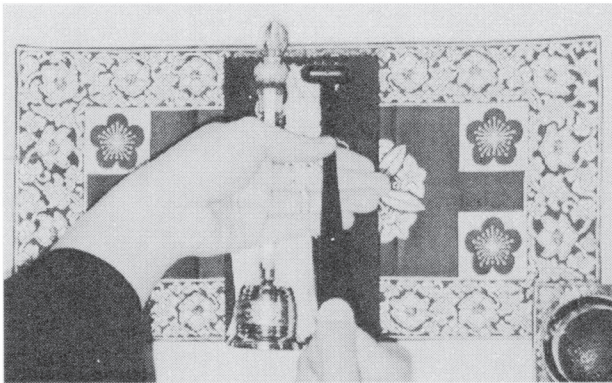
写真で見る基本作法

(その9) ^{しゅもく}撞木を置くときの左手のぬき方

法具を組むときと、法具と解くとき、撞木を押さえ持った左手のぬき方が違います。小さな違いですが、このページを参考にしながら、指導者についてきちんとおぼえましょう。

2) 法具を組む場合

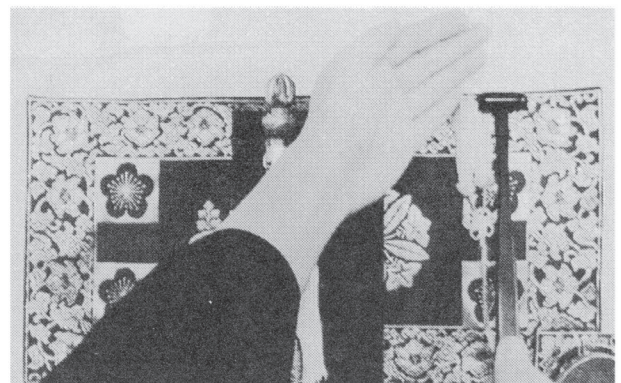
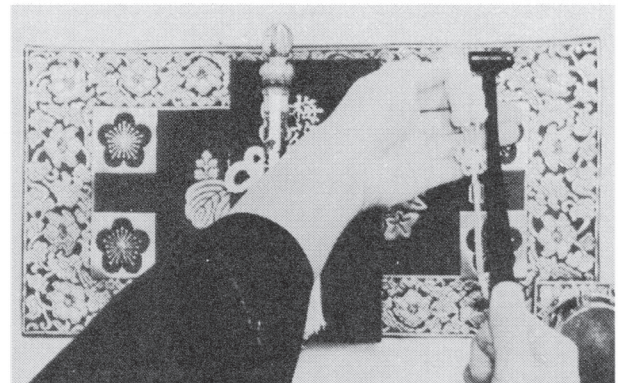
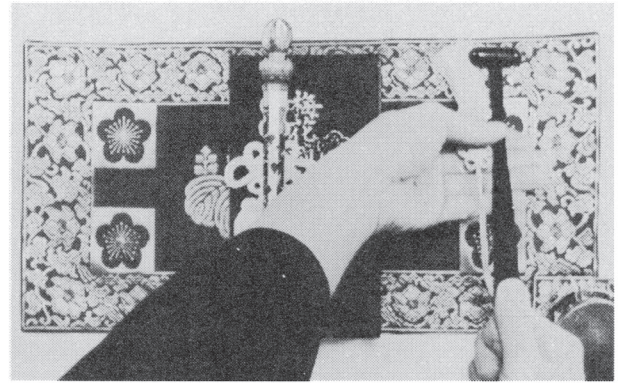
左手は「左方」へぬく



撞木を教典上の鈴柱の右側に添え置き、左手は左ヨコの方へぬく。

1) 法具を解く場合

左手は「前方」へぬく



撞木を袱紗の右側の梅花紋の上に置き、左手は撞木の房を整えながら、前方（撞木頭の方）へぬく。

どちらの場合も、右手は、親指以外の四本の指は軽く握った形となること。

撞木を持った左手は、房の付け根と撞木の柄を押さえ持ち、四本の指は柄に対して直角となること。

※奉詠曲が二頁開きで撞木をタテに置いた場合は **1) 法具を解く場合** と同じ所作となります。



講習中の柴田弘一師範

おらほもやってるよ

自主研修会の広場

各寺院での梅花講活動と同じように、師範・詠範のみなさんも県内各地で自主研修を盛んに行っています。今回は秋田市の曹洞宗宗務所を主会場に、活動を続けている研修会をご紹介します。

師範・詠範の会会長柴田弘一先生の御指導で、曹洞宗秋田県宗務所に於いて、ほぼ毎月一回のペースで講習を頂いております。現在会員は十五名おり、本庁主催の梅花流師範養成所・研修員研修会の現在の受講者や修了したもののから、始めたばかりの初心者まで様々ですが、それぞれのレベルにあった講習をして頂き、皆本場により勉強をさせて頂いております。

「柴田先生の講習会」
こいつ 研修会

しているつもりなのですが、元々の発音の悪さもあり、なかなか納得するお唱えができません。いつぞやの講習会の折りですが、

高嶺の「いまもなお」の「いま」だけで相当の時間をかけて（20分位やったかな）指導頂きました。いやこりや大変だなど思いつつ、ここまで丁寧な指導して頂けるありがたさを感じました。

なかなか先生の期待通りの結果は出せていませんが、がんばろう・挑戦してみようと思わせて頂ける講習、柴田先生ならではと、私はもちろん会員皆感謝しているのではと思います。

すばらしくお忙しい日程の中、我々のために時間を割いて頂き、技術のみならず梅花のすばらしさ・楽しさを伝えて頂く事に感謝すると共に、これからも”びしびし”鍛えて頂くようにお願いしまーす！

また、先生から頂いたものを、梅花講員の皆様にも少しでもお伝えできるよう努力していきたいと思えます。これからもよろしくお願ひします。

研修会代表

本荘市 長谷寺 浅田高明

テレビホン梅花

011-873-7676

三月 六日	四摂法御和讃
三月 二三日	花供養御和讃
三月 二〇日	彼岸御和讃
三月 二七日	供華
四月 三日	花祭御和讃
四月 一〇日	歓喜一
四月 一七日	慶祝御和讃
四月 二四日	御授戒御和讃
五月 一日	観世音菩薩御和讃
五月 八日	慈光
五月 一五日	浄光
五月 二二日	誓願御和讃
五月 二九日	三宝御和讃
六月 五日	平和祈念御和讃
六月 一二日	修証義御和讃
六月 一九日	妙鐘
六月 二六日	澄心
七月 三日	伝心
七月 一〇日	無常御和讃
七月 一七日	月影
七月 二四日	報謝御和讃
七月 三一日	追弔御和讃

お問い合わせ
010-0111 秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺 (011-873-7676)

梅花のふるさと

一 詠讚歌の生まれた風景

観世音菩薩のおわす島

ふださん
普陀山

観世音菩薩第二番御詠歌（浄光）

見わたせば功德の海によせかえす

ひとつひとつの波のきらめき

作詞 赤松月船

■日本僧が開いた中国仏教聖地■

中国浙江省の寧波は、昔、明州と呼ばれ、国内第一の貿易港として栄えていた。言わば中国の海の玄関口である。

西暦八五八年、日本からやって来た慧尊というお坊さんが、五台山で観音像を入手し、明州から出港、沖合いの普陀山という島のあたりにさしかかると、ふいに海面に鉄蓮華が湧きだし、船が通れなくなりました。船中の人々は皆恐れ「観世音菩薩の海を渡る機がまだ熟していないということでしたら、どうぞこの山に止まり下さい」と祈ると、船はすぐに動けるようになったという。そこで慧尊は観音像を普陀山の岸に上げ、お堂を造り祀ることにした。名づけて「不肯去観音院」

（去くことを肯わぬ観音のお堂の意という。）

寧波沖は舟山群島と呼ばれ、多くの島々が海に浮ぶ。普陀山もその一つである。慧尊が観音院を開いたのちには、多くの仏寺が建立されるようになり、中国四大仏教聖地の一つとして、また「海天仏国」として信仰されるようになった。

普陀山は、近くの洛伽山と合わせて普陀洛山とも呼ばれる。フダラク（補陀落）という名前は、南インドにあるという観世音菩薩の伝説上の住処に由来し、日本でも古くから西国三十三観音霊場の「ふだらくのご詠歌」として親しまれてきた。アジアに広がる観音信仰の聖地がここである。そして私達の宗祖道元禪師もまた、ここを訪れたのである。

■道元禪師の訪れた普陀山■

道元禪師が中国（当時の宋国）へ船で渡ったのは西暦一二二三年、まだ二十四歳、求道の志盛んな青年僧の頃である。明州港をめざす道元禪師一行を観音の島々が迎える。普陀洛は遠く海の彼方からやって来る船を守る仏の島でもあった。

【慧尊（えがく）の普陀山開山の故事を伝える壁像】



不肯去観音院（ふこうきよかんのんいん）の壁面にかたどられた石像。中央で観音に合掌しているのが慧尊。現地ガイドの話では多くの参拝者がなでてゆくの黒ずんでいるのだと言う。

普陀山を訪れた道元禪師は、不肯去観音院に隣接する潮音洞にて漢詩を作られた。

潮音霹靂たり海崖の間

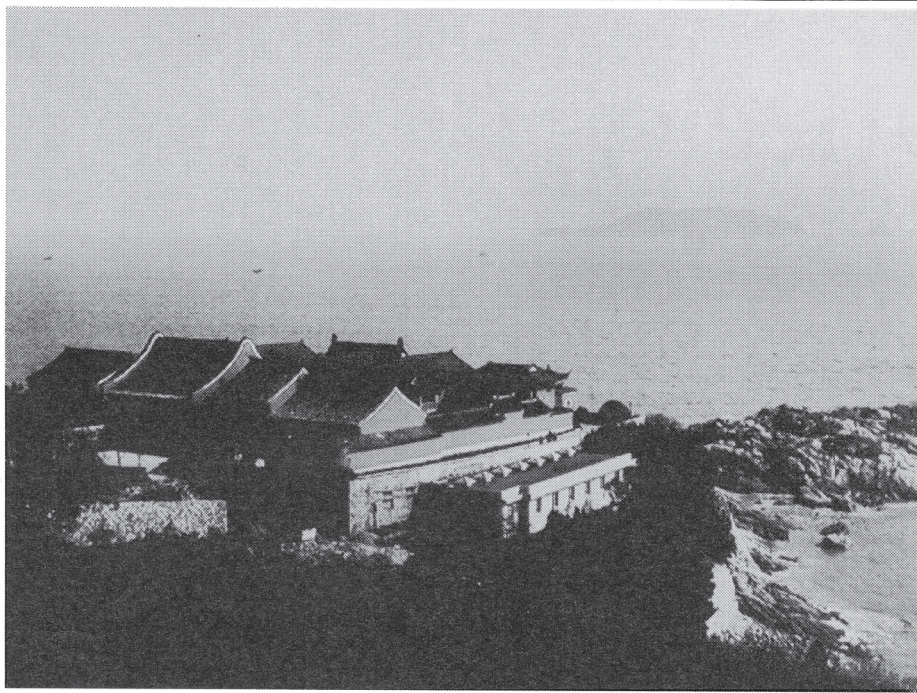
耳辺を側てて看る自在の顔

これを拈じて誰か量らん功德海

ただ眼を回らして青山を見るのみ

潮騒の音が雷のように激しく鳴る断崖の間に、耳をそばだててこれを聞けば観自在菩薩のお顔が見える。この海の音を聞いて、いったい誰が観音菩薩無量の功德を推し量ることができただろうか。

ただ眼をめぐらして青山を見せしめるだけだ。潮音洞は普陀山の南端にある。慧尊ゆかり観音院から海へ向かって降りてゆくと、岩場にぼっか



【普陀山島から洛迦山を望む】左手前の建物の奥に見えるのが不肯去観音院（ふこうきょかんのんいん）。右手の岩場に降りてゆくと潮音洞（ちょうおんどう）。海の向こうに、仰向けになった仏の姿のように見えるのが洛迦山（らかさん）。

り空いた穴が、打ち寄せる波と穴の中の空気との関係で、ときどき大きな音とともに激しくしぶきを吹き上げています。この岩頭から海をへだてて横たわる洛迦山を眺めて作られたものだろうか。

眼前に広がる海は、観世音菩薩の功德あまねくゆきわたる補陀落の世界である。仏教の大陸、宋国への上陸を目前に控えて、道元禅師の胸は期待

にふくらんでいたことだろう。潮騒の音、波のきらめき、背後に広がる青々とした山なみ、眼に映り耳に聞こえるものすべてが、仏の福音のように感じられたのではないだろうか。

作詞者・赤松月船師はこの詩をもとにして「浄光」を作られたという。

■功德の海■

観世音菩薩の功德を称えたお経、『法華経』「観世音菩薩普門品」の中に次のような言葉がある。

無垢清浄なる光の慧日が諸闇を破る

すぐれた智慧は観音の功德のひとつである。智慧とは、この世の苦しみ悩みの原因を明らかにし、苦悩をのりこえて、強く生きてゆく力のことである。『法華経』の言葉はこの力を太陽の光にたとえている。

「浄光」に詠われている「ひとつひとつの波のきらめき」とは、この光のことではなかったらうか。

功德の海とは、道元禅師を迎えた普陀落の海という限られた場所をはるかにこえている。それは、観音の功德の光がみちあふれ、仏教を信じるものすべてをはぐくむ仏の世界のことを言うのかもしれない。

【観音院に参拝する中国の信者達】



普陀山は現在でも観音霊場として、中国国内はもちろん、台湾、韓国などからも多くの参拝者が訪れる

普陀山へは寧波、または上海からフェリーで渡ります。島の周囲は約二〇キロ。仏教の聖地と言われるように、小さな島は寺院が数多く、人口の大半はお坊さんです。不肯去観音院のほかに、有名なお寺に普濟寺、法雨寺などがあり、最近では南溟観音という高さ三三メートルの大仏も新しく出来ました。

周囲を海に囲まれている普陀山は、海鮮料理が名物。現在、上海にいちばん近いリゾートアイランドとして人気の観光地でもあり、国内外の参拝者、旅行者がここを訪れます。

寧波市には、ほかに道元禅師がご本師・如浄禅師と出会った天童山や、阿育王寺などがあり、日本の曹洞宗にはとてもゆかりの深いところですよ。

梅 花 の 仲 盟

梅花流講員

一泊研修会のおもいで

おもいで

県北・合川町

正法院会場

感動をありがとう

清源寺講員 島山セツ

私たちは講員のご主人様方の車で送っていただき、合川町鎌沢正法院に於いて行われた待望の梅花講員一泊研修会に、心を弾ませて参加することができました。会場のお寺では方丈様の合掌で迎えられ、このお寺には、二十年前、日本海中部沖地震の津波で亡くなられた子供たちが供養されていることを知り、心からのご冥福を念じました。

初日は厳粛に開講式、全体講習、分科講習が行われ、講師の先生方には懇切、丁寧にご指導いただき、なお一層の精進を決意しました。

特に夜のお勤め「万燈供養」には感動の連続でした。消灯、読経、地藏菩薩御和讃の奉詠を耳にしながらの巡堂、入堂、点燭、三界万霊、また講員の先祖供養と心和らぐ、一時でありました。

二日目の起床の時、当院の住職さんの「寒くなかったですか」「よく眠れましたか」と行き届いた

た気配りのお言葉にはまことに驚きました。外の落ち葉を掃きに行ったら、作務衣姿で馳せ回り、大きな釜にはすでにお粥が炊き上がっていました。

朝のお勤め、坐禅、柴田先生の浄心には心が洗われる思いでした。食事の時はお経を皆さん一緒にお唱えして、静かにありがたくいただきました。

分科講習は、全分科会とも、「立行の所作」のご指導を頂き本当に良かったと思います。

地藏堂にての日中諷経、延命地藏大菩薩丈六の座像・・・暖かい慈悲の面持ちの地藏様で、皆に慕われ・・・これを永年、大切にお守りすることこそ素晴らしいことと思いました。

次の全体講習の誓願御和讃は、初心者にもわかりやすくご指導いただき、あらためて御和讃の素晴らしさを再認識しました。



暗い静寂の中に涙をさそった万灯供養

ちよつとぶじよほう

梅花と私

五城目町 天昌寺寺族

小沢兼子

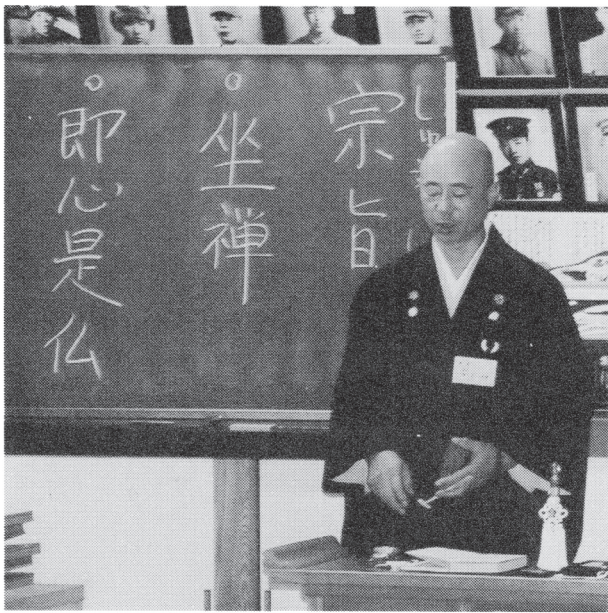


天昌寺梅花講は、東堂が開講し、今日まで地道に歩んできました。毎月昼二回、夜二回の練習、人数は少ないが熱心な講員さん達の活動に支えられています。「今度はい

つ集まる？」の問いに、あり余る情熱を感じて、自分の気持ちを奮い立たせられる瞬間です。

梅花は楽しい！我が講員さん達を見ると、そう思えてなりません。和合を第一に考え奔走して下さる方、生き字引のような方のお話が聞ける茶話会を楽しむ方、詠唱、所作につまづきながらも前進しようと努力を惜しまない方。互いに必要とした助け合いながら共に続けてきたのだと気づかされるからです。それに加えて、この度の秋田での全国大会など、各大会や講習会参加などのささやかなお出かけ等、まさに「お誓い」を実践しながら楽しんでいくようです。

私自身の梅花はというと・・・ご縁があつてお寺で生活させていただいています。信仰心はまだまだ不十分で勉強中です。美声ではなく楽器も出来ず、歌もうまくありません。けれども、歌うことは好きです。何でも、よく落ち込む私は、そんな時大声で歌います。「違うよ！お母さん」。歌詞が違う、音程が違うと子



詠唱とともに仏のみ教えにふれる講習会

最後の閉講式で同行御和讃を奉詠して、同行同衆の喜びを唱えながら、自分の幸せに胸が詰り涙で教典がすすみましました。帰りには皆さんより、「お世話になりました」「気をつけてね」と、また先生からは「ゆっくり休んで下さいね」と、温かい言葉がありました。正法院の皆様には、大変お世話になり心より感謝申し上げます。

梅花を通じ、世の中に役立つ人間として、すべての人、すべての物に感謝し、事態を受けとめ、小さくても夢を大切に前に進みたいと思います。名残を惜しみつつ帰途につきました。陽は傾いていますが、山々の紅葉が美しく映え、私たちの充実した心情を更によさしく包んでくれた秋の日でした。「本当にありがとうございました」

県南・岩城町
厚生年金会館

梅花流に感謝の心
龍泉寺講師 福田イエ子

友達から「梅花講に行ってみませんか」と声をかけられました。梅花講ってどんな事か想像もつきませんでした。考えますと私も七十をとうに過ぎたけれど、何か出来ることに参加したいと思いましたが、自分なりに心に決めました。

最初龍泉寺に行ったのは、平成十四年七月十七日でした。森田先生は「難しく考えないで楽しくお唱えするのですよ」と優しくおっしゃいました。三、四回と練習を重ねていくうち森田先生の教えに感謝致しました。講師の皆さんも真剣です。交流も出来ますので、今では練習日を楽しみにしています。

十月岩城町の一泊研修に参加させて頂きました。一泊研修に行ったのは初めてでしたが、講師の皆さんは、五年・十年・二十年と年月を過ごした大先輩でした。分科会に分かれて先生方皆さんから丁寧に教えて頂きました。法話も聞き元気で生命あることは素晴らしいことと思ひ、梅花の教えに親しみながら有難い気持ちで続けたいと思ひました。閉会の最後に先生方皆様に拍手を送る時、胸がいつぱいになり、涙と共に感謝致しました。

諸先生方始め梅花講師の皆さんと楽しく交流出来ること心からお礼申し上げます。帰りは森田先生に雨の中長い道中運転して頂き御難儀をかけました。

供たちに指摘されながらも。我が道で歌う。この頃は梅花が多いかな。「また始まった」と思われようがかまいません。そういう子供たちも三宝御和讃、彼岸御和讃は習っていないくても少しは歌えます。体が覚えているのです。布教の賜物かな？

習い始めは面白くて仕方ありませんでした。けれど徐々に所作の覚えが悪い、旋揺法が出来ない、足が痛い等誰もがぶつかる壁。

やめようと思った時、「梅花は寺族も出来る立派な布教活動だよ」と師範の先生に助言を頂きました。その頃は、育児とお掃除の毎日に「私はお寺の役に立っているの？」と、何の資格も特技もない私は本気で悩んでいたのです。梅花なら何とか続けられるかもと思つて早や十七年。半人前の私を梅花の仲間に加えて頂き、優しく親切にして下さった師範の先生方や、また常に的確な指導をして下さる師範の皆様、また常えない講師さん達との数々の大切な出会い。梅花だけでなく、色々なものの見方、考え方、人との接し方などを教えて頂いたこと、家族の協力も含めて、今の私がある大きな力になっていてと思います。日常生活の辛さを差し引いても「梅花をやつてよかった」と思えることは、本当に有難いと思います。

「お葬式は梅花のお見送りがないと、やっぱり物足りないな」との檀家さんの声を励みに、天昌寺梅花講では、住職、寺族、講師一丸となって、講師大募集中です。中々うまくいきませんが、「イスを使つてもいいし、みんなと歌うから大丈夫。梅花も生涯学習だよ」を合言葉にがんばって活動しています。

山積み問題はありますが、楽しみながら唱え続けることで、一つずつのりこえて行きたいと思ひます。そしていつまでも梅花の歌声が響く、平和な世の中であつてほしいと、切に願う今日この頃です。 合掌

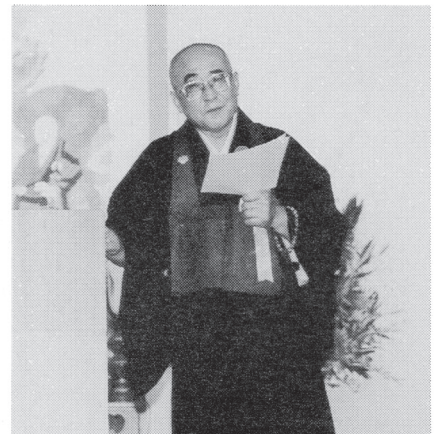
梅花の奉詠と仏教講演会を組み合わせた「合掌のせかい」が開催された。県北の森吉町・合川町・阿仁町・上小阿仁村を中心とする第十教区（教区長・奥山芳寿老師）の主催。手づくりのイベントに訪れた人は約460名。教区寺院・新田寺寺族さんにいただいたりポートである。

県北で教区主催の梅花大会開催

合掌のせかい

法話と詠讃歌のつどい

平成十五年の十一月十日（月）。森吉町のコミュニティセンターが顔見知りのなんとも暖かな雰囲気包まれていました。「第一部法話」は、曹洞宗総合研究センター教化研修部門講師の中野東禅老師が、「先祖のまつりと家族の力」というメインテーマのもとに「仏事・仏壇・お墓の意味と（へのち）のおちつき所」ということでお話しされました。お話しの中で、スキーマーの森徹さんに触れられました。彼はオリピックに出られるほどのモデルの



法話・中野東禅老師

選手でしたが、夢半ばで胃ガンで亡くなりました。以前NHKの「ガンの告知とホスピス」という番組で彼を見ました。最後の気力で滑った。モデルの姿が思い出されました。中野老師のお話で、彼は大きな安心に包まれていたことを知りました。「自分が死んだらみんな自分のことを忘れるだろうな。でもあの世には自分のおじいさんがいるから安心だ」と話されていたということ。私はこの話から、先祖の力・家族の力に何とも言えぬ感謝の気持ちを持ちました。もう一つ印象深い話が、亡くなった人に何らかの形で負い目があるのは自然なことなのだ、その負い目をマイナスに考えるのではなく感謝と安らぎの気持ちへと向かわせるこ

とが大切なのだということでした。午後からの「第二部 第十教区奉詠大会」は、大正琴の三宝御和讃があったり、良寛さまのコーラスがあつたりの楽しいものでした。いちばん感動的だったのは、講員さんに混じって、耕田寺の賢龍さん、福昌寺の康雄さん、福寿寺の一英さん、源昌寺の真行さん等の方丈さんたちが、一緒にお唱えしたことでした。午後の部になったら減るのかなあと思つていましたが、予想外に第一部・第二部とも、ホールは満員。阿仁の山奥に小春日よりの気持ちの良

い得した一日でした。



講員・僧侶とも一緒の登壇奉詠

禅センター！梅花講習

〔宗侶・寺族研修会〕

二月十七日（十時半～十五時半）

講師 本間俊英師範

課題 作法・涅槃御和讃・不滅

〔檀信徒講習会〕

二月十三日（十時半～十五時）

講師 三浦賢翁師範 佐藤晃心師範

課題 涅槃御和讃・ほか

三月十四日（十時半～十五時）

講師 亀谷隆道師範 森田英俊師範

課題 報恩供養御和讃 供華

昼食持参。受講無料・申込不要。

〔宗務所でんわ〕〇二八八六八六八七二

宗侶 寺族 研修会



時間 28日午前9時半受付～29日午後3時

会場 秋田市宗務所・禅センター

講師 阿部伸世師範（山形・乗慶寺）

岩館祖芳師範（鹿角・恩徳寺）分科担当

申込 師範・詠範の会事務局へ